第30回ＯＭＳ戯曲賞選考経過　―2023年12月11日―

吉永 美和子

1994 年の創設から、今年で 30 回を迎えた OMS 戯曲賞。地方発の戯曲賞がここまで続いたことは一つの奇跡であり、継続に尽力した関係者の方々には、改めて敬意を表したいと思う。しかしこの大きな節目となる選考会には、第一回から「戯曲賞の世話人」として司会を務め続けてきた、小堀純の姿がなかった。数日ほど前に新型コロナにかかり、選考会の皆勤記録がついに途切れることになってしまったのだ。昨年の佐藤信の欠席に並ぶほどの喪失感が漂うなか、第一次・第二次の選考委員である岡野宏文＆奥山富恵の司会で、12 時 50 分から選考会は開始された。

五人の選考委員による一回目の投票の結果は、次の頁の表の通り。選考の基準を上げると、○は大賞にふさわしいと思う作品、△は気になる作品だ。

	佐藤	鈴木	佃	土田	樋口
伊地知	△	○			
キタモト		△		○	○
坂本		○			△
武田	△	△	○	△	○
筒井		△		△	
中村	△	△	○		△

最も評価を集めたのは、○二つに△三つと、全員から印が付いた武田操美だった。その次に中村ケンシとキタモトマサヤ、そのまた次に伊地知克介と坂本涼平と筒井加寿子がほぼ横並びという状況の中、それぞれの作品の選評が開始された。

詩的に美しい滅びの風景を見つけられた伊地知作品

第 22 回の『カヌー・ラジオ』以来の最終選考通過となった伊地知克介。俳優・木全晶子が企画する「D 計画」に依頼されて書き下ろした音楽劇は、ある国に不法侵入した女性と、彼女を詰問する博士の二人芝居。サスペンスかと思いきや、実は二人が植物の特性を備えた異人種「植物人」同士であることが判明した所から、物語は SF 調に。二人が情報を交換しあううちに、植物人たちが遠くない未来に、首長竜のように滅亡する運命にあることを自覚する……という哀愁を、上演すれば一時間にも満たないぐらいの文字数で、凝縮して描きだした作品だ。

まず佐藤が、今回の最終候補全体に感じた感想として「物語のバックボーンとして、どれぐらいの世界をとらえているのか。今年はその広がりが、ちょっと小さいように感じました」ということを述べたが、伊地知作品に対しては「言葉は荒いけど、他の作品に比べると、ちょっと違う世界から切り込んでみようという感じがした」と評価。他の選考委員からも「考えていることのスケールが大きいし、人間中心で考えると出てこない発想やアイディアがすごく詰まっている」（樋口）「最後の首長竜が死んでいく描写の詩情が素晴らしい。非常に美しいものをお見つけになったのだなあと思いました」（鈴木）などの声が上がっていた。

その世界観のユニークさは、全選考委員が認めた一方で「動かなくても繁栄できるのが植物のすごさだと思うけど、そういう植物特有の原理原則が、植物人の面白みに関わってきていない。この特殊な設定をほぼほぼすべて台詞だけで説明してしまっているのが、話が前に展開していかない原因では」（佃）「植物人とわかってからの話が、この物語のメインだと思うけど、冒頭のサスペンスの部分が戯曲の半分を占めているのがもったいない。植物人というアイディアが、完全

に作者の体の中に落とし込まれてない印象。こういう世界だからこそ、虚構の中のリアリティをもっと追求してほしかったです」（土田）などの声が。何よりも物語の短さもあってか「ある特殊な状況を、説明しただけで終わってしまった感じがある」（佐藤）など、世界観を語りきれなかった感触を、全員が惜しんでいた。

また鈴木からは、この選評中に「今回の最終候補は『そんなお題が出ていたの？』と思うほど、人類のおしまいであるとか、なんらかの終わりや、失われつつあるものを扱った作品ばかりだった。今の日本が、そういうお題を作家に与えてしまっているんじゃないか」という言葉もあった。そのことを頭の片隅にとどめつつ、この後の選評を読み進めてほしい。

昭和の男の解放を描いた
骨太なキタモトの会話劇

過去 30 回の中で幾度も最終選考に残りながら、意外にもまだ無冠のベテラン劇作家・キタモトマサヤ。『灯灯ふらふら〜the light is still blinking〜』は、大阪府熊取町の市民演劇講座の発表作品として初演され、その後自身の劇団「遊劇体」でも上演している。常に彼の会話劇の舞台となっている、架空の地方都市・ツダ町で 80 年も生きてきたタカシの前に、亡くなった友人や初恋の人などの幻が登場。彼らが時にタカシと会話し、時にコロスとして状況を説明することで、一つの町の衰退とタカシの命の終わりを、同時に描き出した。

本作に関しては、まず「道具立てとしてはよくあるけど、それが逆に原型をそのまま見せられているような感じがしました。共同体の終焉とタカシの終焉を無理せずにきちんと描けていて、作者の書きたかった景色が一番よく見えた作品」（土田）「切なくてこそばゆい記憶の断片。このかわいらしい話をおっさんたちが演じるのが、すごく素敵なんだと思う」（佃）と、主人公のホロ苦い過去をクリアに浮かび上がらせる筆力を評価する声が上がり、作品のテーマに対しても「『これが幸せだ』『これが社会成功だ』と言われてがむしゃらに生きてきたけど、魂が肉体から離れることで、ようやくその呪縛から解放された、昭和最後の男の人の物語だと思って読みました。何もかも手放した感じなのがいさぎよくて、死んでいく時はこんな風だったらいいなと思いました」（樋口）などという評価のコメントが。

ウィークポイントとして挙げられたのは、コロスの使い方とタカシの人生の中身。コロスに関しては「コロスがずっと状況を説明しているのが気になったし、誰目線のコロスなのかもよくわからなかった」（佃）「完全にナレーションみたいなもので、（コロス）なしで書いた方が良かったんじゃないか」（土田）という厳しい意見が多数。またタカシの思い出のほとんどが、初恋の人と友人の話のみだったことに対して、佐藤が「主人公を 80 歳にした必要性が感じられない。僕が 80 歳だから、そう思うのかもしれないけど（笑）」と指摘すると、鈴木からも「そう言われると、80 年も生きてきた人が振り返る記憶って、こんな初恋みたいなかわいらしいことばかりなのかなあ？ 違和感があるというか、作者の夢、そうあってほしいみたいなことじゃないのかなと思います」という気づきが語られた。

また土田から、鈴木と樋口に「男性目線の世界という感じがしてしまうのですが、それは女性から見て気になりませんか？」という問いかけがあったが、それぞれ「男の子のファンタジーという風には思うけど、男たちが勝手なことやってて嫌だなとは思わない。実際に上演を観たら泣く自信があります（笑）」（鈴木）「でも、男の子はファンタジーしかないだろうなと思ってて（一同笑）。死ぬ瞬間にならなければ、男の人はいさぎよく明け渡すことはできないんだと思いました」（樋口）という私見を述べていた。

これまでにない不死を描く坂本のアイディアの面白さ

今回で初めて最終候補に残った坂本涼平。自身の劇団「坂本企画」で上演した『さよならの食卓』は、遺伝子操作の進化により、人間が不死を選べるようになった未来を舞台に、あえて不死に背を向けた女性、不死を選択したのに事故で亡くなったその同性の恋人、この二人の間にできた娘……などの人々が、それぞれの愛と孤独を淡々と、しかし激しくぶつけ合う SF 会話劇だ。

△を付けた佐藤からは、先程のキタモト作品も含めて「小さな共同体を書くときには、この外

にも共同体があるという意識を絶対持ってないといけないんだけど、その要素がまったくないということは、今の戯曲で根本的に指摘しなきゃいけないこと。死と不死について描いているのに、他者との関係……自分が死んだら、自分が生き続けたら『他』はどうなるんだろう？ というのが一切ないのが、根本的な欠点」と指摘しつつも「アイディアとしてはすごく面白くて、いい所に気がついている。〇をつけようかと思ったぐらい」と、描いてるテーマの方は高く評価。ほかにも「こういう世界があることが信じられるぐらい、作者がこの世界を構築できている。生と死を曖昧にしたテクノロジーの進化の果てに、人間が何を思うか？ という話ではなく、利己的な人間たちが何を『愛』と感じるか？ という物語なんだなと」（樋口）「みんな死に絶えて、意識だけがある……というラストが、(A・チェーホフの)『かもめ』のトレープレフが書いた戯曲みたい(笑)。考えていることや提示されていることが面白いので、演出家や俳優に『この世界を生きてみよう』と思わせる力がある」（鈴木）という評価があった。

ただその一方で「脳みそだけが動いてるような気がする。肉体が感じられないし、つまりは生活感も感じられない。あと不老不死をテーマにして、不死についてはいろいろ書いているけど『不老』の部分をうやむやにしているのが、どうしてそうしちゃったのかなあ？ と思います」（佃）「人間は利己的な遺伝子ということをすごく語っているけど、その本能や遺伝子を超えた所で、（主人公の）ミツに『愛』という言葉を使ってほしかった」（樋口）「料理教室で一緒になった人がたまたま不老不死の開発者で、（主人公が）『私にインタビューしてくれない？』と言われるとか、そんなことある？ その辺の世界の構築の仕方が、すごく中途半端。あと、不死になっても事故だったら死ねるというのにも、（設定の）甘さを感じてしまいました」（土田）などの厳しい意見も目立った。

演劇の特徴をすごく考えて特殊な関係性を描いた武田

女性作家として初めて、OMS 戯曲賞の第一回最終候補にノミネートされた作家でありながら、最近は俳優活動に専念していた武田操美。新ユニット「マシュマロテント」で発表し、実に 20 年ぶりの最終候補となった『みえない』は、周囲が突然漆黒の闇になる「暗闇現象」に襲われるようになった世界で、異常に仲のいい中年女性コンビ・一子＆七美の二人が、心の奥底に秘めていた過去に今一度向き合っていく物語だ。ユーモラスなシーンや会話が多い一方で、実は七美は一子のせいで性被害に遭っていて、その記憶を一切なくしているという、非常にセンシティブな背景を持つ世界となっている。

本作については「一子が謎の現象によって（犯人への）復讐を果たし、七美との贖罪のような関係も清算するという、『闇によって闇を制す』みたいな話になっているのがすごく上手。暗い話だけどスカッとしていて、でも喜びきれない悲しさみたいなのが感じられるのが、非常に面白かった」（佃）「今回の候補作の中で、唯一『他者』というか、観客を意識し、誠実に向き合った作品。『私は〇〇です』と言った時に、お客さんがそれを信じるというのが芝居の面白さであり、演劇にしかできないこと。さらに舞台というのは、本当に（会場を）暗くすると、観客も暗闇の中に放り込まれてしまう。この二つの演劇の特徴を、すごく考えて描いている」(佐藤) と、特に「闇」が非常に効果的に使われた点が好評だった。その一方で「この暗闇現象って、社会の見たくない部分や、抑圧しているものが暗くなるってことなのかな？ と興味を持って読んだけど、一子と七美が記憶から消去した事件にしか話がつながっていかないのが気になりました」（土田）「二人に起こったことを考えると、なぜこれほど確固たる友情があるのかという、その理由を感じられなかった。おそらく実際に仲のいい女優二人への当て書きがすぎるというか、その関係性に立脚しすぎなのでは？」（鈴木）という点も言及された。

また樋口は、何回か戯曲を読み返して気づいた私見を、約 10 分もの時間をかけて、以下のように熱弁した。「いつどこで起こるかわからない暗闇で、本当に犯人の男を殺せるのか？ というのが疑問だったけど、上演台本の 18 ページの『これ（暗闇）が二時間続くの？』という台詞の所からは、ずっと暗闇の中……現実ではなく、彼女たちの心の動きなのでは？ と思って読んでみたんです。七美が本当に性被害を忘れてるかどうかはわからないけど、奥底には『犯人を殺せるもの

なら殺したい』『時間を戻せるなら戻したい』という思いがあり、きっと一子にもそれはある。以後40年間その核心には触れず、馬鹿話を続けていたけど、『暗闇現象』という外部からの極限状態によって、彼女たちは自分の内側しか見られないような状態に、突如放り込まれたわけです。その時にまず『殺したい』という思いを夢の中で実行するけど、それでも被害者の気持ちが晴れることはない。そこでもう一つ彼女たちが取った行動が、時間を戻して『(犯人の所に)行かない』という選択をすること。報復じゃなく、自分たちが望む選択肢を、自分たちで選ぶことができた時に、彼女たちは今まで触れようとしなかった心の闇を、ようやく夢の中で晴らすことができたんだ、と。そういう読み方をしたら、私の中で引っかかっていたことが、すごく解消されたと思いました」。

さらに鈴木からは、選考委員全員に向けて「本当に小学生の時に、一子のせいで七美がひどい目にあったら、この二人って仲良くなれますかね？ この関係が本当と思ってほしいのか、本当じゃないと思ってほしいのかがわからない」と質問が。まず佐藤が「僕は、それは観客が考えるだろうから、(作り手は) わかんなくていいという立場。作る側がそれをわからせる方向に持っていってしまうと、芝居がすごく痩せるんじゃないかな。(関係性を見せるのに) 当て書きに頼ってるのは確かだけど、日常的な関係を舞台で利用するのは、演劇だからできること。そうすることで、現実にはあり得ないような関係性を見せようとしたんだと、好意的に解釈することもできる」 と擁護すると、土田からは「その判断のつかなさが、わざとなのか書き足りないからなのかがわからないんですよね。ただ、理由はわからないけど『嘘つけ、ありえねえよ』という感じにはならなかった」と、ニュートラルな意見を。それでも鈴木は「この作品が二人の女優さんの関係から生まれたことはまったく悪いことではないけど、どうしても納得ができない。そこが曖昧でも、上演としてはきっと面白いものだったとは思うけど……」と、なおも食いついてきたが、土田の「もうこの議論、先が見えない」というタイトルと引っ掛けた言葉に全員が大笑い。これをきっかけに、一周目のターンとしては異例と言えるほど長時間の議論に、いったん幕が閉じられた。

筒井の作る「働く喜び」に
救われる人も多いはず

京都で「ルドルフ」という演劇ユニットを主宰し、第22回の『フンベルバルディンクの衛星生中継』以来のノミネートとなった筒井加寿子。『ヒロインの仕事』は、趣味で漫画を描いている同人漫画家と、彼女にプロになることを勧めるキャリアウーマンの二人を中心に、現代女性の仕事観―特に演劇の世界にも通じる「プロとしてお金を稼ぐか」「アマチュアで好きなことだけをやっていくか」の二択について、深く考えさせる会話劇だ。実際に同人漫画家に取材したという、リアリティのある会話が特徴となっている。

まず好感度の高い点に関しては「登場人物の関係性が、キャリル・チャーチルの『トップ・ガールズ』にインスパイアされたのか？ と思いました。登場人物たちがすごく生き生きとして、女性がどのように生きていくのか？ がきちんと描かれている」(鈴木)「『好きな仕事だけど、それでお金をかせごうとは思わない』などと言うと、何か嘘くさくなりがちだけど、そこが嫌らしくなく描けているのが上手い。『人から評価されたい』と思う自分のことを、改めて顧みる所もありました」(土田)「社会や人々が考える『成功』とは違う、自分にとっての働く喜びとはなんだろう？ ということを、ものすごくキチンとすべて描いている。この物語を必要としたり、観て心を救われる人は、たくさんいると思います」(樋口) などの言葉が。一方で辛口の評としては「途中までは、登場人物それぞれの立ち位置の違いが、上手に書かれていて面白いと思ったけど、二幕に入ってから急にまとめに入っちゃって『え、なんで？』って思った。せっかくちゃんと種まきをしたのに、芽が出ているだけのものを、無理やり回収して商品にしてしまった感じ。書いていて本番が近くなってしまったのかな？ (笑)」(佃)「今どきの風俗を全部拾い上げてはいるんだけど、それを書いたことで何を言いたかったのか。風俗劇をやる場合は、やっぱりそこに対する作家の批評性……なんのためにそれを演劇化したのか？ ということが絶対必要なんだけど、その肝心な所がつかめなかった」(佐藤) などの言葉が。

また佐藤からは「一番大きい欠点は、回想場面の入れ方。(実際に演じる) 場面を挿入しなければならない回想と、台詞だけで解決した方がいい回想は、やっぱり厳しく分けるべきだと思うん

だよね。本筋の途中で急に回想場面を入れるには、すごく手続きがいるはずなんだけど、これは使い方がイージーな感じがしました」と、筒井だけでなく、すべての作家に向けられたような忠告も出ていた。

非常にリアルなスケッチ力と新しい試みで中村が飛躍

キタモトと並ぶ、最終候補の常連と言える「空の驛舎」の中村ケンシ。第20回の『追伸』以来、10年ぶり二度目の大賞受賞となるかが期待される『コクゴのジカン』は、コロナ禍を乗り越えたものの、数年後に閉店することが決定してしまった百貨店の従業員食堂が舞台。社員からパート、出入りの清掃作業員や警備員などが、立場を超えて会話を交わしていく姿を「レキシのジカン」「ドウトクのジカン」など、学校の時間割のようにパート分けして見せていく。ストレートな会話劇が特徴だった中村の、新しいスタイルへの挑戦に注目が集まった。

この試みに対しては「今までは言葉に借り物感があったけど、今回はそれを感じなかった。強い台詞はないかもしれないけど、非常に誠実なスケッチ」（鈴木）「時間割のような形に強引に持っていってるけど、その方が会話がリアル。そもそも日常会話というのが、実は無理な会話というのが本当なんだという、すごく核心をとらえている」（佐藤）「コロナを経験した百貨店の人たちは、肩書など関係なくまとまることで乗り越えて行ったんだと思う。そうやって人同士がつながる時は、必ず言葉が必要になるけど、それは人と人との距離の間で学んでいくもの。学校を出た時に、本当の国語の時間が始まるということが伝わりました」（樋口）
などの称賛の言葉が。特に佃は、第28回の選考会の時にも披露した、レコード針の「ナガオカ」でバイトしていた時の話を持ち出し「CDの出現で会社が衰退して、このまま沈むとわかってる状況でも、呑気な人は変わらず呑気だったりして、本当にここに書かれてある通りの雰囲気だった（笑）。このスケッチ力はすごいし、その場にいる人たちだけでなく、今そこにいない人たちのこともちゃんと想像できる。ワンシチュエーション芝居ならではの書かれ方が、本当に上手いと思いました」と感嘆したように語った。

ただ選考委員たちの間で疑問の声が上がったのは、食堂の隅にたたずみ、時おり登場人物たちに絡んでいく、謎の女の存在。特に警備員・久我と、東日本大震災で行方不明になった教師として対話をする場面には「なぜ久我君がこんなに先生に会いたがってるのか、先生も久我君に本当は何を教えたかったのかが感じられない。しかも（津波で大勢の生徒・教師が犠牲になった）大川小学校の悲劇を匂わせるのであれば、それがなんなのか？ にキチンと決着を付けて書かないと、ドラマを重厚に見せるためだけに、そういうエピソードをはさんだように感じられてしまう」（土田）「横山拓也さんのことを思い出した。自分が選んだ題材について、なぜそれを選ぶ必要があったのか？ という疑問を彼には感じるけど、中村さんの震災の部分も決定的にそういう場面。しかも具体的な（行方不明者の）数字まで入れて実体を持ってくるというのは、僕はやってはいけないことだと思う。フィクションを作るということに対して、作家たちはもう少し誇りを持ってほしい」（佐藤）などの、厳しくも真摯な指摘があった。

これで全作品の、一回目の議論が終了。少し休憩をはさんで、大賞に推したい一作品だけに〇をつける、二回目の投票が行われた。その結果は左の通り。

	佐藤	鈴木	佃	土田	樋口
伊地知					
キタモト				○	
坂本		○			
武田	○				○
筒井					
中村			○		

実際の事件を扱うならば周到な調べと覚悟が必要

佐藤と樋口が武田操美、鈴木が坂本涼平、佃が中村ケンシ、土田がキタモトマサヤ。ここ最近は、一人か二人の候補者に票が集中するケースが続いていたが、久々にほぼ完全に票が割れたため、全員から「バラバラ過ぎる」という苦笑交じりの声がもれた。ただ佃と土田は「武田さんと迷って……」という注釈が付いていたため、総合的には武田がリードと言える。

佃は中村を選んだ理由として「ワンシチュエーションの技術の高さが、ちゃんと戯曲賞として推せるというのが一番。女性の存在にもう一手ほしいなあとは思うけど、樋口さんがおっしゃっていた『災害によってヒエラルキーがなくなる』という感じが、すごく好きですね」と述べる。それに対して他の選考委員は「やっぱり震災の引っかかりが大きい。この先生、何か別の理由で亡くなっていてもいいわけだし、実際に僕らが集団の記憶として体験した事件に触れるなら、それなりの覚悟や責任……とまでは言わないけれど、何かがいるんじゃないの？ とは思います」（土田）「実際の事件を扱うなら、相当周到な調べと、それを使う必然性を持ってこないと。もし置き換えが効かないと言うのであれば、その理由がほしい」（佐藤）と、やはり震災の扱いを疑問視する一方、樋口からは「ものすごく安易に震災を出しているようには感じなかった。コロナがちょっと落ち着いてきた時に書かれた本だけど、10 年後、20 年後に私たちはコロナという災害について、何を見届けていくのだろうか？ と。そこにあえて東日本大震災の話を入れることで、過去と現代と未来の時間を込めようとしたんじゃないかと、私は思います」という意見も出ていた。

坂本に〇を入れた鈴木は「私は戯曲に、まったく知らない世界に連れて行ってくれたり、見たことがない見方を与えてくれる所にビックリしたいんですけど、今回の候補作には、正直そんな驚きがなかったです。でもその中で坂本さんは 『私は一人ぼっちだ！』ということを、こういう形で……それこそトレープレフの戯曲のような感じで書いたんだ、という風に思って。技術はあまり高くないけど『私は一人ぼっちだ！ そして困ってるんだ！』と、すごく強く叫んでいる気がすることには魅力を感じたし、それを書いた切実さは買いたいと思いました」と理由を語る。それに対して土田は「会話を作る基本が、少し足りないという気がする。登場人物って一つの人格だから、その人格と人格が摩擦を起こす時に会話が生まれるわけだけど、ここではお互いが意見を補完しあってるというか、作者の言いたいことを登場人物の口を借りて書いているだけというような気がして。全体的に、AI を見ているような感じになります」と反対意見を。

その会話の技術に対しては「感情をちょっと避けるというか、今私たちが生きる次元とは違う場所で会話がしたいと思って、こうなったのかな？ と。私たちが考えなければいけないことが、実はすごく描かれていると思う」（樋口）「『頑張ったけど、ここまでしか技術がないから書けませんでした』じゃなくて、関係性も持てないほど一人ぼっちな人たちの会話を書こうとした結果ではないか」（鈴木）という推測もあったが、土田は「未来のことを書く時にリアルを求めようとは全然思わないけど、安易に会話をさせれば、未来っぽい感じが出ると思ってるんじゃないか？ という感じが、僕はちょっとしてしまう。そこに至る格闘の跡が、もう少し見たかったです」と、やはり大

賞のレベルにはないということを念押しした。
深刻な事件を描くのが先か
俳優を良く見せるのが先か
　この坂本の議論から、ゆるやかに武田の話題に移っていったが、まず鈴木から「坂本さんの創作過程は全然わからないけど、武田さんはちょっと見えるぞと思っていて。武田さんも（七美役の）小石（久美子）さんも全然存じあげないけど、多分仲良しの二人が居酒屋とかで『私たちが主人公の話を、自分たちで作って一緒にやろうよ』みたいなことを言い出して……」と、まるで見てきたかのように語りだし、全員がその再現力の高さに思わず笑い出す。武田に〇を付けた佐藤は「『こんな事件があったのに、異様に仲が良い中年女性って、不思議じゃない？』という設定が先にあって書かれた作品だとは思うけど、なぜ仲良しなのかということまでは、ちゃんと納得がいくようには描けてないんだろうね。僕が欠点だと思うのは、二人の抱えている秘密が早くから見えすぎること。ギリギリで出してきた方がよかったと思う」と、支持しつつも弱点を指摘。
　そこで佃が「この『異様に仲がいい』って、他の誰かがいて伝わることだけど、それはやっぱり七美さんの妹・幸香さんでしょ？ 幸香さんは事件のことも知っているし、一子さんが嘘をついて逃げたことも知ってると思う。そんな幸香さんから見たら、やはりこの二人は異様だと思うんだよね」と、幸香の存在によって二人の関係の特殊性を際立たせることができたと評すると、他の選考委員たちからも「確かに！」と同意する声が。さらに樋口の「阿佐ヶ谷姉妹から始まったのかな？ と思ったりして（笑）。姉妹でもカップルでもないのに、なんでそんなに仲が良いの？ とみんな思っているけど、なんだか成立しているという、あの感じを作ってみたかったのかもしれません」という意見にも、納得するような雰囲気が流れていた。
　それらの意見を受けて、鈴木は「それでわかった。やっぱり私は『性被害のトラウマを抱えた二人を書きたい』じゃなくて、阿佐ヶ谷姉妹のようなことをやりたいのが（執筆の動機の）最初なんじゃない？ って思ってしまうんです。そのために小学生の時にいたずらされたという、明らかに大変な事件を出してくるのが、なんか気持ち悪い。最初に読んだ時から『この二人が仲のいい姿を見せる』というのを、非常に想定して書かれている感じがしたんですけど、後からプロフィールを読んで『ああ、そういうことか！』って思った」と、大賞にためらいがあるポイントを明確に挙げた。また、そう感じた理由について「私がよく、おばちゃん世代の女優二人から『私たちをよく見せる、何かいい本ない？』って頼まれることが多いからなんです。ついこの間もそういうことを聞かれたし。そのバイアスがかかっていたから、さっきの居酒屋の会話も『見たんだもん！』という感じでできたわけで（笑）」と打ち明けると、佃も「確かにおばちゃんからよく言われるよね。おじちゃんからはあまり言われないけど」と、実際にそういう傾向があることを補足していた。
　この意見に対しては「難しい問題ですよね。完全に自分の無意識下に消し去ろうとするトラウマを設定するには、性暴力に準ずるぐらい大変な記憶じゃないといけないとは思うけど、それを都合よく使うな！ と言われるのもわかる。ただ、僕はそんなに二人の仲良しアピールの芝居だとは思わなかったです」（土田）、「性被害って、実はどういうやり方をしても、誰かが傷つくテーマで。ただ、性被害を描く時って、どうやって明るみにするか、どうやって責任を取らせるかなどの、外側のシステムについて言及されることが多いけど、被害者はそのもっと手前にある心の問題を乗り越えないと、一歩も踏み出せないんです。このまま死ぬまで核心を見ずに生きたかった彼女たちが、文字通り闇にぶっこまれたことによって、ようやく心の内を見つめることができた。私は主人公二人の関係性より、そんな被害者の心を描くことありきだったんじゃないかと思います」（樋口）という考察が。それを受けて鈴木は「みなさんの意見には『なるほど』と思うけど、でもそれは全部『かもしれない』ですよね。私が阿佐ヶ谷姉妹の方が先だと思うのも、『かもしれない』に過ぎませんが。『そう感じるのは、この台詞があるから。これが証拠です』という証拠探しをしてもいいんだけど、この場ではあまり意味がないことですよね。もう、私の性格がねじくれ曲がってるのかもしれないです（笑）」と、完全に納得はいかないながらも、刀を鞘に納めるような形となった。

ここで岡野から、三度目の投票の声がかかったが、土田からの提案で、二度目の投票で誰も〇を付けなかった二名を除外し、四名の中から口頭で名前を挙げることになった。その結果、佐藤、樋口、佃、土田の四名が武田の名を告げ、鈴木だけが坂本の名前を挙げた。しかし鈴木が「武田さんになったとしても、大暴れはしません（笑）」と明言したことで、16時10分に武田操美『みえない』が大賞に決定した。新型コロナの影響で、第28回から未上演の作品も応募対象になって以降、二年連続で未上演作品の受賞が続いていた。そのため、実際に上演が行われた作品の大賞受賞は、実に三年ぶりとなる。

未知の可能性に賭けるか技術不足で切り捨てるか

続いては佳作。ここ最近のOMS戯曲賞は、単純に「大賞の次に良かった作品」に授賞するのではなく「荒削りだけど、将来性の高いもの」「不完全だけど、新しい試みに挑戦してるもの」など、年ごとに選考基準に変化が生じている感触がある。そのため結論から先に言うと、なかなか波乱の選考となった。まず第一回目の投票の結果は左の通り。

	佐藤	鈴木	佃	土田	樋口
伊地知					
キタモト					
坂本	○	○			○
武田					
筒井				○	
中村			○		

坂本に三票、筒井に一票、中村に一票という結果に。筒井を推した土田は「人物間のドラマはもう少し太くしないといけなかったけど、会話とかはやっぱり上手なので」と理由を語り、大賞に続いて中村を挙げた佃は「佳作は『自分の中の二番を推すのとは違う』という意見もあったけど、今回は武田・中村以外には推せそうな作品がなかった。そうなると中村さんを推すしかないし、それが基準から外れていると言うのなら、無印になっちゃいます」と、一貫した気持ちを語った。それを聞いた土田は「大賞に推したキタモトさんを、佳作に推すのは違うのかな？ という気がしたんですけど、だったら僕も素直に最後まで、キタモトさん一筋で行きます」と、候補者の変更を宣言した。

一方、大賞に続いて坂本を推した鈴木は「稚拙というのはわかるけど、やはり『見たい風景』というものがあって、そこにお客さんを連れて行こうと思ってはいるんだな……という所には乗りたい。むしろ佳作に推すべきでした（笑）」と理由を述べると、佐藤も「確かに欠点は多いけど、未知の領域に手を付けているということはすごく認める」と、そのポテンシャルを評価したいという発言をした。

それに対して佃が「不老ということを考えると、ここでやり取りされているような内容にならない気がしてしょうがない。だって20幾つで（老化が）止まるということは『永遠にお前は労働力のままだ』ってことなんでしょ？ その辺が曖昧なまま『死ぬ／死なない』ってやり取りされているのが、どうしても解せないんだよなあ」と疑問の声を上げたが、佐藤は「僕が『未知の領域』と言ったのは、まさにそこ。今まで不死というのは、必ず哲学的な問題に行ってたんだけど、今は『この世界は実はバーチャル・リアリティだ』みたいな、身体的には受け入れがたいような説がいろいろ出てくる時代。その感覚を『なるほど』と思える人との不死の議論は、哲学ではなく、今までとはちょっと違ったものになるはずなんですよ。この戯曲はもしかすると、その新しい領域に行けるんじゃないか？ という気がした。つまり死も不死もフィクションなんだよ、完全な。

ある意味身体性が欠如していて、身体と生、身体と主観を連続して考えてない。それって確かに土田さんがおっしゃった通り、身体を持たない AI と同じなんです。身体という受信機がないまんま、いろんな解決策を出していくという世界。そういう意味で、何かに触れるものがこの作品にはあった。だから佃さんに反論するとしたら、僕は不老にはあえて攻め込まなかったという感じがしたし、その薄っぺらさが実はすごく大事なんじゃないかと思う」と、佃の感じる身体性の欠如が、実は大きなポイントになっていることを解説した。

しかしそこに土田が「(戯曲を) 書く時に、本当はそれじゃあ書けないはずという所が目についてしまう。たまたま料理教室で一緒になっただけの人がインタビューをお願いして、踏み込んだ話をしてくるというのが、なんというか……」と言いよどむと、樋口から「作者が持っていきたい道筋がもう決まっているから、それに沿って書いている」と助け舟が。土田はそれに「そうなんです！」と同意して「僕だったら、登場人物がそう（思った通りに）は動いてくれないだろうから、じゃあどうすればいいか？ という工夫で結構苦しむんだけど。今後のことを考えて佳作を授賞するのはいいけど、それにしては技術が稚拙じゃないか？ と思うだけ」と手厳しく評した。

そこでもう一人、坂本に〇を付けた樋口が「勝手な憶測だけど、初めて（人の）死を体験した子どもの考える死に近い」という、新たな切り口の意見を提示。「生まれて初めて身近な人を亡くす経験をした時に、人は『自分を置いていかないでほしい』という孤独や寂しさを感じるんだと思うんです。坂本さんには、今、ようやっと死の入口に立ったばかりという感じを受ける。作家は書き続ければ何かしらの技術はついていくけれど、死の入口には一生かけても立てない人もいるかもしれないし、はなから立っている人もいるかもしれない。私が坂本さんに〇を付けたのは『まさに今、死の入口に立っている』という奇跡を、そこに感じたからというのがあります」と、実は非常に稀有な状態で書かれたという感触を受けたことを説明した。

一通りの意見が出た所で、岡野から「では『さよならの食卓』が佳作ということでいいですか？」という問いかけが出たが「不可ではないけど、僕は佳作とは思えない」(土田)「もうちょっと『坂本さんじゃないとしたら、誰かな？』という話をしたい」(鈴木) という意見が出て、まだ選考が続くことになった。

賞を与えること自体よりもその過程を伝えるのが重要

まず、坂本以外の候補者を推す土田と佃からは「作者が作った罠の中で、作者だけがもがいて答を出そうとしている印象が強い。それは台本を書く上で、一番もったいないやり方」(佃)「観客に自分の書きたい世界を届けようとした時に、何かしら頑張って失敗してるんだったらただの技量不足だけど、わりと簡単に届くもんだと思ってしまってるんじゃないか？ と。僕の偏見かもしれないけど『これで他者に伝わるかな？』という逡巡をした結果だとは思えないんです」(土田) という意見が。この土田の言葉には「それって技量不足と言うより、伝えようとする意志が感じられない態度が気に入らないってわけですか？」(鈴木)「頑張りが足りないっていうことでしょ？」(佃) と、次々に反応。それに対して土田は「いや、(意志が) ないとは思わないし、頑張ってると思いますよ。だったら僕の意見は『もうちょっと他者を怖がった方がいい』ということです」と、言葉足らずにとらえられかねない部分を補足した。

そこで樋口が「『佳作だけど、もっと深く考えて書かないといけないよ』と、私たちのような他者が言うことによって、彼は気づくことがあるのではないか」と水を向けると、佃は「多分僕も土田さんも、 坂本さんが佳作を取ったことで『これでいいんだ』と思っちゃうことを恐れていると思う。この後の選評とかで、何が足りなくて、どういう意図で佳作だったのかというのが伝わるなら、僕は（授賞して）いいと思う」と譲歩の姿勢を見せたが、土田は「それでも、賞を取ったら伝わらないですよ」と言い切り、全員から「言い切っちゃうんだ?!」と言わんばかりの声が出た。

しかしそこで、樋口が意外な話を持ち出した。樋口は OMS 戯曲賞の大賞を二回受賞した、 現時点で唯一の作家だが「私にとって OMS 戯曲賞は、苦痛な賞だった。というのも一回目の受賞の時は、(選評会で) すごくコテンパンに言われたんです。だから二回目の時は、劇団員に無理やり応

募させられました」と振り返ると、鈴木や佃や土田は「大賞なのにコテンパンなの?!」と驚き、当時も選考委員を務めていた佐藤が「確かにそうだったね。『わからない』という意見がすごくあった」と、事実であることを補足。続けて樋口は「だから受賞しても、ちっとも嬉しくなかったです（笑)。『圧倒的に足りないところが 99%あって、１%だけが良かった』って言われたけど、あまりにコテンパン過ぎて、その１%が良い所だって思えなかったぐらい。でもそう言われたことで『ひたすらやるしかない』って思ったし、あのコテンパンさが私にはすごく重要でした」と、受賞でいい気にはならないのではないかという予想を語ったが、やはり土田が「でもやっぱり、（賞に）落ちてコテンパンにやられる方が、よりコテンパンに思えますよ。自分の経験だけど（笑)」と反応し、またしても振り出しに戻った。

この膠着状態に、ついに鈴木からは「『どういう風に佳作を決めていく？』という話をしたかったけど、これは無理だなあという感じになってきちゃって。今回だけでもいいから、佳作のなんらかの基準があれば『じゃあ、この人にしようね』と気持ちよく言えるけど、今はみんなが違う基準になってるから、議論をしてもしょうがないんじゃない？ という気持ちになっています」と弱音が飛び出す。すると佐藤から「基準を決めるんじゃなくて、まずは佳作を決めること。それぞれの基準については、全員がちゃんと正直に言えばいいと思う。その言葉って結局は、選考した側に返ってくるからね」と折衷的な意見が出て、樋口も「すごい矛盾を言うようだけど、誰が大賞とか佳作になったか、という結果よりも、そこに至るまでにどんな引っ掛かりがあり、どんな議論があったかという内容を作家に伝えることの方が、賞の一番大事なことだと思います」という心境を率直に語った。

この時点で時計は 17 時を回った。授賞式まで二時間を切っている。岡野は「そろそろ佳作を決めてもよろしいでしょうか？」とうながしたが、鈴木は「私はまだ気持ち悪いです。でも時間的な都合があるのなら、それに賛同します」と進言。運営スタッフから「時間はまだ大丈夫です」と OK サインが出たので、さらに議論を深めていくことになった。

一人ひとりの主観を平均化することはできない

鈴木が引っかかっているのは、やはり「このような議論の後では、佳作の基準がわからない」ということ。それに対して佐藤は「今決まっている基準は、まず大賞と佳作は違うということ。大賞は、今年の（最終候補の）中で一番いいと思うもので、一番票が集まったものにしようというのが基準。でも佳作の場合は、技量を見るのか可能性を見るのか、一人ひとりの主観になるから、それを平均化することはできないと思う。技量と一言で言っても『何をもって技量とするか』自体に基準がないわけだし。だからいくら言っても、どうどうめぐりのままになるんじゃないかな」と、特に基準を作らなくても問題ないと主張。さらに「今までは佳作って、なんとなく『大賞を取れなくて惜しかったから、授賞しよう』という基準だったけど、最近それがなくなってきたのは確か。だから選ぶのがより難しいかもしれないけど、それでも佳作は出すべきだと思う。自分たちが選べない苦しさより、『出さない』という空白の方がみっともないから」と、あえて難しい道を選んでいることと、それをなんとか乗り越えようという思いを語った。

ここで佃から「佳作候補を、二つ選ぶというのはありなんですか？」という提案が出た。実はこの方法は、少し前に鈴木がフッと口に出していたのだが、本人は「今はどれにも手を挙げられないというのが現状」と否定。そこで佐藤が「だったら裕美さんが選べるようになるまで待つしかない。裕美さんも聞きたいことがあれば、それについてみんなしゃべればいいんじゃないの？ まず僕は裕美さんが『さよならの食卓』を推すことに、何を迷っているのかを知りたい」と水を向けた。

鈴木は「私は坂本さんを推したけど、それに対して技量がないとか、書く態度に疑問があるとか言われてしまうと、私がそこまで読めてないのか？ 気がついてないのか？ と思ってしまう」と、何かを選ぶ立場になった人ならではの不安と、それゆえに自分の考えを補強できる基準が欲しいという思いを語る。その発言を受けて、佐藤は「裕美さんが『技量』を問題にしなかったのは、別にそのことをわかってなかったからじゃないと思う。それを加味する必要がないと考えて

いただけ。でも戯曲賞は基準を作るより、お祭りでいいんじゃないの？ とも思う。若い人に勢いをつけるためにやっているという趣旨に、戻った方が良くないかって、ちょっと思うのね。もちろんこっちがスッキリと授賞できる方がいいんだろうけど、もともと賞を出すこと自体が、あまり気持ちいいものじゃないと、僕は思っている（笑）」と、改めて戯曲の評価は相対的であることと、固く考えすぎないことを提唱した。

ここで土田が「皆さんの話を混ぜ返すつもりはないんですけど」と前置きをした上で「僕はキタモトさんが、今まで何も取られていないのが意外だったんです。賞を取ることで、やっぱり作家は確認できることがあると思う。『あなたには力がありますよ』ということを、賞という形で言ってあげたいという気持ちがあります。これは人情でもなんでもなくて、ここまで書ける人ではあるんだから、きちんと評価することも必要じゃないか？ と思うからです」と、改めてキタモトの授賞を推した。そしてこの選考会のレポート執筆中に初めて気がついたが、実はキタモト作品は土田が大賞候補に挙げたものの、大賞の選考中にその是非について、一切議論されていなかったのだ。選考会終盤の土壇場になって、ようやくキタモト作品について改めて話し合われる時間が浮上した。

コテンパンな意見を伝えるのも選考委員から作家への愛情

キタモトの授賞には、佐藤が強く反対。「まず一つは、キタモトさんが持っている生死の問題、老いの問題が、この作品の中にちゃんと反映されているのか？ ということ。ほとんど初恋の話だけで（主人公の）人生が完結しちゃうのは、ちゃんと劇作家は仕事をしたのか？ と、それこそ技量の問題に入るんじゃないかと思う。それともう一つは、アマチュアと仕事をするのに、この台本ではダメだということ。（市民講座の）現場でいろんな人と対話をした時に、あなたはどういう立場で立っていたのか？ もしかしたら、演劇人として立っていなかったか？ という疑いが強いんだよね。それはさっきの裕美さんと同じように、想像でしかないんだけど、そこがすごく引っかかる。僕は物書き同士として、もうちょっと真摯に向き合う方が彼のためになると思うし、甘くしちゃいけないという気持ちがある」と、この作品での受賞はキタモトのためにもならないと述べ、全員がそれに同意したような空気となった。

10 分間の休憩が取られたあと、先ほど佃が提案した「一人二票入れてみる」という条件で、二回目の佳作の投票が行われた。その結果は左の通り。

	佐藤	鈴木	佃	土田	樋口
伊地知		○			
キタモト				○	○
坂本	○	○			○
武田					
筒井			○	○	
中村	○		○		

坂本が三票、キタモトと筒井と中村が二票、伊地知が一票。最後まで坂本の受賞に反対していた土田が「この結果を見ても、坂本さんが一番多い。もちろん伝えたいことは伝えるけど、坂本さんに佳作をお渡ししたらどうでしょう？」と提案し、全員がそれに賛同。17 時 20 分にようやく、坂本涼平『さよならの食卓』の佳作授賞が決定した。

その直後、樋口が「読んで気になったことを伝えるのは、文句じゃないと思うんです。私はかつて選評会でコテンパンにされたけど、それは本当に大きな愛だなあと思ったので。たとえグッ

ドなことじゃなく、バッドなことであったとしても、きっとありがたいことだと思います」と、改めて作品の率直な感想を伝えることの重要性を語った。
　少なくとも私が立ち会ってきた戯曲賞選考会の中では、最もエモーショナルな言葉が飛び交い、かなり熱い議論が交わされた 30 回目の選考会。それだけどの作品も、読み手の心を激しく動かすようなものぞろいだったということだろう。オブザーバーとして議論を聞く側にも、非常に刺激になるやり取りが連続する選考会となった。
作家が作家を応援し続けた

OMS 戯曲賞、30 年目の感謝

　30 回目となる授賞式&公開選評会は、定刻の 19 時から始まった。大賞の武田は、挨拶のスピーチで「私は今日のために『大賞を取ったら着よう』と思って、ハリウッド女優みたいなワンピースを買っていたんです。でも 17 時の時点で電話がなかったので（注：大賞・佳作受賞者は、通常は当日 17 時頃にその結果が電話で通達される）、着替えてしまって……もっといい服で来たかったので、残念です（笑）。しかも落ち込んで電車に乗ったものですから、（会場最寄りの）淀屋橋駅ではなく、北浜駅まで行ってしまって。もうそんなのも、全部含めて幸せです」とユーモラスに語り、会場からも笑いが起こる。
さらに「私は自分の劇団（劇団鉛乃文檎）を 20 年近く休止していて、劇団をやらない以上、自分で作・演出をするのはダメだと思っていました。でもコロナとかいろいろあって『どうなるかわからない。やりたいことをやろう』と思って、去年小石久美子さんと『マシュマロテント』を旗揚げしました。その流れで『じゃあ、応募でもしてみるか』と応募したら、このような……私、第一回も（最終候補に）残っているので、苦節 30 年です。本当にありがとうございました」と、感慨深げに礼を述べた。
　佳作の坂本は「こんな栄誉ある賞をいただきまして、本当にありがとうございます。この作品は去年の夏に自分の劇団で上演して、その時もお客さまには大変ご好評をいただいたのですが、こんな風に再評価というか、改めて多くの方の目に止まったことが本当に嬉しく思います」と、落ち着いた雰囲気で挨拶。そして「佳作ということで、まだもう一個上があります。今後もどんどん戯曲を書いて書いて、出していきたいと思いますので、これからもよろしくお願い申し上げます」と、大賞への意欲を見せた。
　その後に行われた公開選評会では、奥山富恵が司会を担当。大賞と佳作は全選考委員が、他の作品についてはそれぞれ二人の選考委員が選評を述べる。そのほとんどの発言は、選考会で出てきたことと重なるので、ここでは省略させていただく。ちなみに「『これでいいんだ』と思われたら良くない」と言われていた坂本には、佃や土田がその難点をしっかりと指摘していた。
　そして最後に佐藤が、30 回も続いた OMS 戯曲賞について「僕はこの戯曲賞に、選考委員としてではなく、同じ戯曲書きの仲間として関わっていると思っています。なぜ OMS 戯曲賞をやっているかというと、本当に劇作家を応援したいから、生み出したいからですね。これだけ選考過程で話されたことと選評が同じ選考会というのは、めったにないんです。大体はもうちょっと綺麗にまとめてしまうから」とその思いを語り、さらに「改めて受賞した二人におめでとうと言うと同時に、最終選考に残られた方、応募してくださった 40 名の皆さまに、心から『どうもありがとうございました』と、同じ芝居仲間として伝えたいと思います」と礼を述べた。30 年の歴史を肌で知る人間ならではの、万感の思いがこもった言葉だった。それは今回無念の欠席となった、世話人の小堀純の思いも引き受けていたはずだ。

「佳作でボコボコにされるとは思ってもいませんでした（笑）」

　公開選評会を終えて、大賞受賞の武田は「皆さんの選評は本当に感動しましたし、本当に嬉しかったです。いただいた言葉を受けて、（大賞の助成金が発生する）再来年三月までに再演しよう

と思います。初演の時は暗転ができない会場だったので、暗闇の場面では客席を丸ごとビニールシートで覆ったんですが（笑）、次は暗転ができる所でやりたいです」と宣言。選考会で議論の的となっていた、この作品の執筆の動機については「七美のモデルになったのは私の親友なんですが、彼女は本当に子どもの頃の記憶があまりないんです。『暗い公園の記憶がある』というだけで、（七美のような）性被害はないと思うんですけど」と、実はモデルがいたことを告白。そして劇団鉛乃文檎を休止したのも、一緒に劇団をやっていたその親友が、演劇を続けられなくなったのが理由だったそうだ。そんな紆余曲折の果てに大賞を受賞できたことに「鉛乃文檎の人たちが、今回の公演でもすごく助けてくれた。一緒にやってくれた小石さんと、今もメンバーを名乗ってくれる劇団員に、本当にお礼が言いたいです」と感謝を述べていた。

一方の坂本は「こんなに選評でボコボコにされるとは思いもしませんでした（笑）。『佳作を取ったのになあ……』と思いながら聞いていましたけど、本当にありがたかったです。大まかにいって、台詞が下手なんだということが身にしみました」と、きちんと厳しい指摘を受け止めたという感想を。そのなかでも嬉しかったのは、鈴木から「『寂しいんだ』ということを叫んでいる戯曲」と言われたことだったそう。「寂しさを書くことが劇団のテーマなので、それが先行していると思っていただけたのはありがたかったです。再演するとしたら、この『寂しさを叫ぶ』ということに注力したい。選評を反映して手を入れた結果、もしかしたら別の作品になるぐらい変化してしまうかもしれないけど、なんらかの形でもう一回作品にしたいと思います」と決意を語った。そしてきっと次は、選考委員の言葉を念頭に置いた上で、大賞を目指した作品を応募してくれることだろう。

OMS 戯曲賞が始まった 30 年前は、まだ関西小劇場界自体の歴史が浅いこともあり、20〜30 代の候補者しかいなかったと記憶している。しかしそれから時が経ち、還暦を超えた応募者も珍しくなくなった。その中から、第一回の時は 20 代前半の新人作家だった武田が大賞を取り、当時はまだ小学生だった坂本が佳作を受賞するという、時の流れ……というより、時間の重みを感じさせる、いつもより感慨深さを感じる年となった。

来年から OMS 戯曲賞は、少し運営の体制が変わり、これまで主催してきた Daigas グループに加えて、後援の企業が入ることが予定されている。今後は一企業の枠を越えて、関西全体で支えていくような賞になっていくことになるだろう。

これからの新しい出会いや、さらなる発展に期待したい。

（文中一部敬称略）